

- (16) 清家章『埋葬からみた古墳時代 女性・親族・王権』吉川弘文館、2018年。
- (17) 清家章ほか「DNA分析からみた岡山県津山市久米三成4号墳出土人骨の親族関係」『日本考古学』第58号、2024年。
- (18) 柴原聡一郎「大型前方後円墳の復元」『佐紀古墳群 航空レーザ測量調査報告書』六一書房、2025年。
- (19) 吉田野乃編『史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書-史跡整備に伴う発掘調査の概要-』八尾市教育委員会、2001年より引用。
- (20) 堺市文化観光局世界文化遺産推進室編『百舌鳥古墳群測量図集成』堺市、2015年より引用。
- (21) 徳田誠志「仁徳天皇 百舌鳥耳原中陵第1濠内三次元地形測量調査報告」『書陵部紀要』第69号〔陵墓篇〕宮内庁書陵部、2018年より引用。
- (22) 上田直弥『古墳時代の葬制秩序と政治権力』大阪大学出版会、2022年、p.80。本稿執筆に際してもご教示を頂いた。
- (23) 小林行雄「堅穴式石室構造考」『古墳文化論考』平凡社、1976年、p.163。
- (24) 今尾文昭「誉田山（誉田御廟山）古墳」『天皇陵古墳』大巧社、1996年。
- (25) 岸本一郎ほか編『玉丘古墳Ⅱ』（主体部盗掘坑および長持形石棺の調査）加西市教育委員会、2017年、p.16。
- (26) 英文題目の校正にあたり、ライアン・ジョセフ氏よりご教示を頂いた。

附 山口隆一について

福 尾 正 彦

はじめに

昭和10年（1935）10月8日の応神天皇陵の前方部頂部における「石材発見」に伴い、同月27・28日に現地調査を担当し、「惠我藻伏岡陵前方部頂上発見石材調査報告」（以下、「応神陵前方部報告」という。）を執筆したのは、当時、宮内諸諸陵寮の事務嘱託の任にあった山口隆一（以下、「山口」という。）である。

以下、この山口の人と学問について、簡単に触れておきたい。

1. 山口の略年譜（表1）

山口は、明治35年（1905）に東京で出生の後、成蹊小学校・同中学校（現在の東京都豊島区池袋所在、大正13年（1924）には同中学校ともども同都武蔵野市吉祥寺へ移転）、早稲田高等学院（同都練馬区）を卒業している。この間、父親が三井物産香港支局長であったこともあり、香港に在住したこともあった。その後、昭和2年に京都帝国大学の選科生として入学している。選科生には学士号は与えられていないため、卒業年は不明である。選科の修行年限も本科と同じく3年であり、同5年には卒業したと思われる⁽¹⁾。京都帝国大学では史学科に在籍しており、大正5年、同大学に新たに考古学講座を開設した濱田耕作に師事したものと考えられる⁽²⁾。その後、昭和6年には当時、陸軍中將であった四王天延孝の長女と結婚し、一男三女をもうけている。同8年9月7日から同12年12月27日までは、宮内省諸諸陵寮考證課の事務嘱託として勤務し、前述の応神天皇陵の調査などに従事している。諸諸陵寮における考古学関係者としては、和田千吉（大正14～昭和4年、「陵墓調査に関する事務を嘱託」）に次いで、二番目の出身者としての採用である。

昭和2年12月18日に杉栄三郎諸諸陵頭に拠って決裁された「諸諸陵寮掛規程」には、（考證課）考證掛は、「一、陵墓ノ考證検討ニ関スル事項、二、古墳上申書類ノ處理ニ関スル事項」を職掌とし、（考證課）調査掛は、「一、陵墓考證ニ資スヘキ諸般ノ調査ニ関スル事項、二、寮史其記録ノ編纂ニ関スル事項、三、考證ニ要スル古器物及文書書類ノ保管ニ関スル事項」を担当するとある⁽³⁾。山口は担当業務の一環として、応神天皇陵の現地調査にも従事したものと考えられよう。

山口は宮内省退官の5ヶ月後に、「華北航業総公会」（中国）に勤務、青島（日本占領地）に赴任している。華北航業総公会は、『華北航業総覧』⁽⁴⁾に拠れば、中華民国27年（昭和13）2月に華北沿岸の航運（水上運輸）を始めとする産業、貿易等の諸調査を実施する機関、「船舶聯合局」として発足した。同29年に華北政務委員会によって中国社団法人として、華北航業総公会に改組されて以後、引き続き「北支航運界の指導

統制」をおこなっていた。「大東亜戦争は長年欧米によって掌握されて居た中国航運業の復興を約束するに至り華北の航運業も今後東亜共栄圏建設の一翼を担ってその責任も愈々重大となった。」⁽⁵⁾ともあり、戦局に協力する体制となった組織になっていたことが知られる。後に山口が、銃殺される遠因になったとも考えられる。昭和19年には、華北航業総公会の理事（北京公処長）になり、終戦を迎えた。同21年に中華民国外交部の国際問題研究所研究員となって、同23年に退職している。翌24年の北京のフランス書店勤務を経て、翌25年には日洲産業北京駐在員として、日中貿易に従事していた。そして、昭和26年8月17日、中華人民共和国の毛沢東共産党主席を暗殺するとの陰謀があったとされる事件（「毛沢東暗殺陰謀事件」）に関わったとして、軍事裁判により即日、天橋刑場広場にて銃殺された。享年46歳であった。

2. 山口の著作（表1）

山口の最初の著作は、成蹊小学校第二回卒業生によって編集された『思出の記』（①。数字は著作目録番号に対応。以下、同じ。）に掲載された。12歳の時である。文末には、『古今和歌集』なども引用されており、その方面への関心もうかがわれる。京都帝国大学在学中の昭和5年には、マックス・コリニョンと濱田耕作

表1 山口隆一の略年譜と著作著作（年齢は満年齢。月日が不明の場合は満年齢とした。）

区分	年齢	年 月 日			事 項 ・ 著 作	出典	備 考
		西暦	和暦	月 日			
1	0	1905	明治38	7 28	出生、5歳で逗子に転居		
2					成蹊小学校卒業		
①	12	1918	大正 7	6	「思出の記」（成蹊小学校第二回卒業生【編】『思出の記』、成蹊学園）	山口 1918	
3					成蹊中学校卒業。この間、「暁星学校」で一学期学ぶ		
4					早稲田高等学院卒業		
5					少年時代は、香港在住（←父親は三井物産香港支局長）	国松 1961	
6	22 ～25	1927 ～30	昭和2 ～5		京都帝国大学 史学科選科在学		
②	25	1930	昭和5	11	「古典考古學」（日仏会館【編】『佛蘭西科學』下巻分冊1、岡書院）		マックス・コリニョン、濱田耕作との共著
7	26	1931	昭和6		結婚（四王天延孝陸軍中將の長女）、1男3女をもうけた	国松 1961	
③		1932	昭和7	2	「デュアメル近業「未來生活の諸相」に就いて」（『美・批評』第1輯 [1930至1931年]、美・批評社）		
④	27			3 1	「モリソン夫人物語」（『ドルメン』昭和8年3月号、岡書院）		
8	28	1933	昭和8	9 7			
⑤				9 20	「日本石器時代に關する一疑問」（『史前学雑誌』第5巻第5号、史前学会）		執筆は諸陵寮奉職以前。
⑥	29		昭和9	8	「青銅時代及び鐵時代」（『世界歴史大系』第1巻【史前史】、平凡社）		本シリーズ（全25巻）の監修は、濱田耕作・大山柏ほか
⑦	30		昭和10	11	「恵我藻伏岡陵前方部頂上発見石材調査報告」（宮内庁「行政文書」）	宮内省諸陵寮考證課嘱託として勤務	
⑧	30	1933 ～37	昭和11	5	「ウラディミール縣ヲロソフ村近傍に於ける石器時代の遺跡」（『史前学雑誌』第8巻第3号、史前学会）	齋藤 1959 ほか	訳文。現著者は、ペー・クー・ドリアツェフ。3/12訳了
⑨	31		昭和11	7	「日本人—歐羅巴に於ける日本民族起源論の一例—」（『史前学雑誌』第8巻第4号、史前学会）		訳文。現著者は、ユージェーヌ・ピタール。6/9訳了
9	32		昭和12	12 27			
⑩	32	1938	昭和13	5	「メリメと考古學」（『史前学雑誌』第10巻第3号、史前学会）		
10				5	「華北航業総公会」（中国）に勤務、青島（日本占領地）に赴任		
⑪	34	1939	昭和14	8	「特別讀物 支那民船物語」（『実業の日本』第42巻第15号、実業之日本社）		
11	39	1944	昭和19		「華北航業総公会」理事（北京公処長）		
12	41	1946	昭和21		中華民国外交部の国際問題研究所研究員		
13	43	1948	昭和23	11	国際問題研究所を離職		
14	44	1949	昭和24		フランス書店勤務		
15	45	1950	昭和25		日中貿易に従事、日洲産業北京駐在員		
16	46	1951	昭和26	8 17	軍事裁判により即日、天橋刑場広場にて銃殺		

*区分の算用数字は「略年譜関係」、丸数字は著作関係。本表については、陵墓調査室員の多大な協力を受け、共同で作成したものである。
 〈参考文献〉国松文雄1961「毛沢東暗殺の首謀にされ銃殺された山口隆一君」（『わが満支廿五年の回顧』、新紀文社）
 齋藤响1959『悪の研究』（東京元々社）〈収録記事に、昭和26年8月25日付「朝日新聞」の夫人芙美子氏の手記の引用あり〉

との共著である「古典考古學」(②)が刊行された。コリニョンはギリシャ彫刻研究で著名な考古学者、美術史家である。山口はフランス語、英語、中国語など語学の才に恵まれており⁽⁶⁾、濱田耕作の薫陶を受け、実績を重ねたことにより、共著者となったものと考えられる。

結婚後の昭和7年には、「デュアメルデュアメルの近業「未来生活の諸相」に就いて」(③)を発表している。フランスの作家であるジョルジュ・デュアメルが、アメリカを訪問した際の印象を書いた『未来生活の諸相』を紹介し、彼がなぜ「アメリカに愛憎をつかせねばならなかったか」を当時の日本の世情に照らして述べている。山口が「この人は少し変わり者」、「国際問題に非常に興味を持っていた。」⁽⁷⁾という評価を持たれていたことにも関連する内容となっている。「モリソン夫人物語」(④)は、女性飛行士のモリソン夫人がオランダ領の島に不時着した際の島民の対応を、「長者伝説」等と対応させて記述したものである。

諸陵寮時代の著作は、奉職前に執筆されたもの、さらには「応神陵前方部報告」(⑦)を含め、5本を数える。そのうち、「日本石器時代に關する一疑問」(⑤)、「ウラディミール縣ヲソロウ村近傍に於ける石器時代の遺跡」(⑧)、「日本人－欧羅巴に於ける日本民族起源論の一例－」(⑨)は、『史前学雑誌』に掲載されている。同雑誌は、史前学会(大山柏設立)が刊行する日本の新石器時代を主に扱った学術雑誌である。この時期を代表し、さらには山口の考古学研究の集大成ともいえるべき著作は、濱田耕作や大山柏も関わっている『世界歴史大系』第1巻(史前史)に掲載された(⑥)。本書は、豊富な図版と挿図が特色となっており、総頁612頁のうち、148頁について山口が執筆している。その冒頭で山口は、「嘗て往ったことも、遺物を見たこともない歐羅巴の青銅時代、鐵時代を述べるに當って、私は只管歐米考古學者の著作に頼る他、道が無かった。」とし、多くの関係著作を参考としつつ、「最近學界の傾向の一端として紹介」するとしている。参考文献には、「出色の人」とするチャイルド(Vere Gordon Childe)の著作も含まれている。

渡中以後の著作は少なく、「メリメと考古學」(⑩)と「特別讀物 支那民船物語」(⑪)のみである。⑩は小説『カルメン』などで知られるメリメ(Prosper Merimee)がおこなった建造物の調査・保護政策を含めた考古学的業績を採り上げており、その紹介の先駆者として位置づけられよう。

おわりに－山口の学問－

山口の学問は大別すれば、1)「ヨーロッパ先史時代」(②・⑥・⑧)、2)「日本石器時代」(⑤)、3)「文化人類学」(④・⑪)という三分野に亘っているが、そのなかに当てはまらないものもある(①・③・⑦・⑨・⑩)。とくに、「応神陵前方部報告」は特異であり、古墳を扱った唯一のものである。山口が京都帝国大学在学を終えた昭和5年までには、『京都帝国大学文学部考古学研究報告』は11冊刊行されていた⁽⁸⁾。山口在学中に本報告に伴う古墳関係調査は実施されておらず、退学後の同8年に刊行された「(第12冊)讃岐高松石清尾山石塚の研究」関係の現地調査は同6年春のことであった。したがって、おそらく京都帝国大学在学時には古墳発掘の経験はなかった可能性が高い。にもかかわらず、「応神陵前方部報告」の記述や実測図は、十分に検討に耐えうる内容であり、大学における受講等の経験がその基盤となっていると考えられる。各方面に関心があり、異国語に堪能なことは、山口の学問形成に大きく寄与しているが、それなりに体系化されるまでには至っておらず、不幸な死によって途絶えてしまったことは残念でならない。

註

- (1) 山口の京都帝国大学における在学状況については、高木博志京都大学人文科学研究所教授(令和6年[2024年]当時)のご教示により、『京都帝国大学一覽』昭和4年(国立国会図書館請求記号281-5)で確認した。同2年に史学科選科に入学し、同書の同5年には関係記録は見当たらなかったため、同年8月時点では在籍していなかった、と考えられる。
- (2) 角田文衛編『考古学京都学派』、1994年・1997年増補(雄山閣)には、山口に関する記載は確認できないが、山口在学中の京都帝国大学における考古学研究の状況を知るうえで、大いに参考になる。
- (3) 「第一六号 諸陵寮掛規定改正ノ件(十二月)」『諸陵寮 例規録 昭和2～5年』(宮内公文書館所蔵 識別番号10519)
- (4) 華北航業総公会編『華北航業綜覽』、1942年(華北航業総公会)

- (5) 引用文は、『華北航業綜覧』の序に収められている。その執筆者は華北航業総公会副会長の山口實である。
- (6) 国松文雄「毛沢東暗殺の首謀にされ銃殺された山口隆一君」『わが満支廿五年の回顧』、1961年（新紀文社）
- (7) 註（6）と同じ
- (8) 京都大学学術情報リポジトリ (KURENAI)
<<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/communities/69e4f1f2-d4aa-45ff-8b27-1e01a5ec5a6a>>（令和7年12月8日、最終閲覧）

附 応神天皇恵我藻伏崗陵前方部墳頂出土埴輪の意義

加藤一郎

今回の報告により、応神天皇恵我藻伏崗陵（以下、当陵とする）の前方部墳頂から確実に出土したと考えられる埴輪片は12点にのぼる。このなかには、宮内庁書陵部が1989年に刊行した出土品展示目録『埴輪Ⅰ』において、出土位置が「前方部」と記載されていた資料も含まれているが、前方部のなかでも墳頂と場所が特定でき、かつ埋葬施設にともなうものと判断できる点は重要といえる。というのも、近年の埴輪研究は精緻化がすすんでおり、使用された場所による様相の比較や、同一古墳内における微細な時期差にも関心がはらわれているからである。

今回報告された12点の埴輪片は、朝顔形埴輪の口縁部とされる12をのぞけば、いずれも形象埴輪の破片といえる。なお、12についても現状では朝顔形埴輪としているものの、当陵の朝顔形埴輪の口縁部としては非常に小さいものであるため、円筒埴輪列を主体となって構成する円筒埴輪や朝顔形埴輪とは異なる種類の埴輪（壺形埴輪など）となる可能性も考えられる。

この12点のうち、蓋形埴輪となるものは第3図に示された1と第5図5～7、9である。1、5については、当陵の中堤出土の蓋形埴輪〔『埴輪Ⅰ』（2）〕とほぼ同様のものとなることが推測されるが、この中堤出土資料は台部に円形の透孔が四つ穿たれている点が注意される。円筒埴輪における基準をあてはめるとすれば、古い特徴をとどめているといえよう。ただし、1、2の台部にも四つの透孔が穿たれていたかどうかは不明である。6については以前に紹介したことがあるが⁽¹⁾、蓋形埴輪の肋木の破片であり、1、5とは異なるタイプの蓋形埴輪になろう。このことから当陵の前方部墳頂には、肋木をもつものと肋木をもたないものという二つのタイプの蓋形埴輪が設置されていたことが確実である。ただし、両者の配置方法がどのようなものであったのかまでは不明である。

肋木をもつ蓋形埴輪は前期古墳から出土する印象があるものの、大阪府西清水2号墳（土師の里2号墳）といった中期古墳においても確認されていることは以前にも指摘したところであるが、その後、東百舌鳥陵墓参考地の後円部墳頂などにおいても存在が確認されている⁽²⁾（第12図）。

家形埴輪となるものは、第3図の2、3、第4図4、第5図10、11である。これらの配置については残念ながら不明である。いずれの破片も、その大きさは当陵の飛地ろ号である栗塚古墳で確認されている家形埴輪⁽³⁾に匹敵する、あるいはそれを凌駕するサイズの大型の家形埴輪になると推測される。前方部という副次的な埋葬施設にともなうものとはいえ、王陵にふさわしい家形埴輪のサイズといえる。今後、王陵クラスの家形埴輪のサイズを考えるうえで、貴重な比較材料になってくると思われる。

なお、第5図8については、円柱状の破片であり、家形埴輪もしくは冪形埴輪となる可能性を考えるが、墳頂という位置を考慮すれば家形埴輪である可能性が高いであろうか。また、第8図24、25は、これと同一個体の破片ではないかと推測される。

上記のとおり、今回報告された12点の埴輪は形象埴輪の破片資料が多く、型式学的な位置づけをおこなうことが難しいため、その製作時期を特定することは難しい。ただし、一つ手がかりとなるのは、これらの破片では破面の色調が黒色となることである。これまでにしられている当陵の埴輪はすべて窖窯による焼成と考えられ、黒斑はみられない。その点は、今回の資料も同様である。しかし、当陵の円筒埴輪にはこのよ